

クィア・ネガティヴィティの不可能な肯定
——固有／適切でない主体の脱構築的批評
羽生有希

「ウィ」の肯定とは他者の肯定、言語としての他者の、さらには言語の他者の肯定にほかならない。したがって、他者の肯定としての「ウィ」の思想は、脱構築はニヒリズムに帰着する否定思想ではないというデリダの主張をはっきり確証するものの一つである。…デリダがここで問題にする「ウィ」は、…言語以前に到来し、…それを可能にしているような「根源的な」肯定である。…「ノン」と語り書く場合でも、この根源的な肯定があらかじめ言語の場を開いているのでなかったら、まったく不可能になってしまうだろう（高橋, 2003, pp. 169–170）。

「否」を通して肯定することが構造的に可能であるのみならず必然であるとする言えることを認めつつ、私たちはある種の「否」が十分に否でなく、同一性の〈否認〉としての肯定となりうることをいかに批判できるだろうか。このように問うことすら十分ではなく、否を通じた肯定を説くことは、否を通じた〈否認〉としての肯定の批判と、実は裏表の関係にあるべきものなのではないだろうか。

このような問いかけがどれほど形而上学的に聞こえるにしても、この問いは性を問うにあたってひとが図らずも出会わざるをえないものであると筆者は考えるのであって、その意味で、多くの他のフェミニズム哲学の論者が行ってきたように、哲学の議論をフェミニズム／クィア理論に応用するのみならずむしろフェミニズム／クィア理論から哲学の問いを深化させることを本稿は狙っている。このようなプロジェクトの鍵概念は、クィア・ネガティヴィティ¹である。

クィア・ネガティヴィティの前提と遍歴

リー・エーデルマンは2004年に『未来なし』(No Future)を著した。ここではまず簡単に当該書のモチーフをクィア理論の大まかな流れとの関係で指摘するにとどめよう。エーデルマンは『未来なし』で、保守にせよリベラルにせよあらゆる政治的なものの領野が、望まれるべき未来とイコール化されている「御子 (the Child)」という形象を自らの限界にして構成されていることを指摘し、このような「御子」の保存とそれへの不可能な同一化を通じて私たちの生／性が構築されることを「再生産的未来主義」と呼んで批判した。当該書の冒頭からその姿勢は明らかにされる。曰く、「政治的なものそれ自体がそのうちで考えられるようなロジックを、御子のイメージを画定する幻想が不変に形作っている」のであって、その意味で再生産的未来主義は、「政治的言説なるものへのイデオロギー的限界を課しており、そのプロセスにおいて異性愛規範の絶対的特権を温存するのだが、それはこの共同体諸関係の組成的原理へのクィアな抵抗の可能性を想像できないようにさせ、政治的領野の外部に投げることによってである」(Edelman, 2004, p. 2)。そしてエーデルマンは、たとえば同性愛者を現在の未来の秩序に迎合させるのではなく、このように社会の外部に追放されるクィアの現今の社会に対する否定性をラディカルに受け取るよう示唆する。「私たちはむしろ形象的に、「上記のどれでもない (none of the above)」へと投票してよいし、象徴界の法に应じる恒常的な否の至高性へと投票してよいのであって、そのことは当の法の定礎的行為、その自己構成的否定に共鳴する」と彼は述べており (Edelman, 2004, p. 5)、ここでは法がクィアに課す否定を法それ自体に向け返すことが重要なのだ。クィア・ネガティヴィティの否定性は「どれでもない」ことの顕示に求められると言ってもよい。

だからこそ、クィア政治／研究におけるクィアという語の使用が侮蔑語の(再)領有であったことを知るものにとって、このように現今の異性愛規範的な秩序からの否定を受け取り、それを当の秩序自体に向け直す理論がクィア理論の正統——クィア理論においていかに正統が疑われるべきものであるにしても——に位置することを否定するのは不可能である。『未来なし』でのクィア・ネガティヴィティは、クィア研究の初期のテキストであるレオ・ベルサー

二の「直腸は墓場か」における、ゲイ・セックスの暴力による近代主体の解体の議論に共鳴することで過去の議論を引き継ぎ、発表直後から議論を喚起したため、2006年にはPMLAにてMLAでのパネル発表を受けた特集が組まれた。また、同時期のクィア理論における時間性への注目とそれを受けたGLQでのラウンドテーブルの特集においても、「再生産的未來主義」の批判は無視されるべきでない議論として受け止められた。さらにブームを経た後でなお、クィア・ネガティヴィティへの応答は続いており、2015年の4月には国際基督教大学にて「クィア・ネガティヴィティ再考」をタイトルに掲げた公開研究会が開かれた。また同年5月に刊行されたフェミニスト文化研究の代表的な学術誌である*differences*の特集は、「反規範性なきクィア理論」であったが、「反規範性」〈あり〉の代表的理論として集中的論駁の対象になったのがエーデルマン的な否定性であったことは(Wiegman & Wilson, 2015)、クィア理論が自らの支柱としてのみならず必要な亡霊としてのクィア・ネガティヴィティに依然として取り憑かれ続けてきたことを意味しているように思える。

けれどもクィア・ネガティヴィティのクィア理論における重要性を否定することができないということは、それに対する反対がなかったということとイコールではない。事態はむしろ逆である。すでにMLAパネルおよびクィアな時間性についての議論でも、セックス・ピストルズなどの大衆文化の諸作品に規範的枠組みを解体する契機を見出して、エーデルマンとは別の形で異性愛規範的な時間の在り方を批判しつつクィア・ネガティヴィティを定義づけようとしたジュディス・ハルバーシュタムとエーデルマンとの対立は見逃されるものではなかった。性的逸脱性を評価しつつも否定性を唱えるのではなく、あくまでクィア・ユートピアを目指そうとするホセ・E・ムニョスの議論も、やはり2006年のPMLAに明らかだった。このように考えるなら、クィア・ネガティヴィティの理論史的意義は単にそれが既存の議論を引き継ぎつつ後のパラダイムとしても定着したということにあるのではなく、むしろ様々な異論を含めて議論が続いていること自体に見出されるとさえ言える。

それではエーデルマン自身は自らの理論への反駁をどのように受け止めているのだろうか。エーデルマンは先に挙げたパネル発表において自らに対する批判に応酬している。彼はユートピアニズムの主張が社会の依って立つ「内的対

立」を無視したものであることを、フロイトの心的構造やアドルノの否定性についての議論を援用しながら足早に退け、ハルバーシュタムに対しても、「政治的対立そのものを説明するような滞留し続ける否定性と個別の政治的諸立場を否定するというより単純な行為とを混同している」と批判し、クィア・ネガティヴィティの意義を次のように再確認する。曰く、再生産的未來主義を最も揺るがすのは、「アドルノが書いているような「すべてを従属させる同一性 (identity) 原理」によってなされる原初の侵犯、暴力への欲動的な抵抗を通じて行われる実定的アイデンティティ／同一性 (positive identity) のクィア・ネガティヴィティによる拒否」なのだ (Caserio, Edelman, Halberstam, Muñoz, & Dean, 2006, p. 821, 822)。エーデルマンのこのような応酬を見れば、再生産的未來主義批判の理論的な核心はこの同一性原理への否定にあると考えてよいだろう。

筆者はこのようなアイデンティティ／同一性に対する根源的な否定性への注目を極めて重要なものと捉える。にもかかわらず、いやむしろだからこそ、エーデルマンの立場を彼自身に向け直すことが必要であるように思われる。彼が提唱する否定性の議論は、本当に実定的アイデンティティを否定しきれているだろうか。「欲動的な」、それゆえ特定の形式を帯びることのないクィアな抵抗が正にその否定性において暗黙の裡に卓抜した政治的主体を温存する可能性はないのだろうか。そのような可能性を批判しつつ否定性を重要視したとき、そもそも実定的アイデンティティを拒否することとはどのようなものとして再考されうるのだろうか。

このような問いに答えるため、本稿はまずクィア・ネガティヴィティのテーゼを理解するための補助線として、フレンチ・フェミニズムを利用し、両者の接点を固有／適切でない主体——このタームはいわゆる「分割された主体」を含む、自己を自己ならざるものにしていく／されている主体の総称として筆者が用いるものだ——による抵抗という点を軸として描き出す。クィア理論とフレンチ・フェミニズムの系譜学的関係を否定することは難しいにもかかわらず、クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの理論的關係は管見では十分に明らかにされてこなかった。本稿の最初のセクションはそれゆえ一義的にはクィア・ネガティヴィティのテネットをフレンチ・フェミニズム、も

しくはラカン派精神分析を批判的に継承したフェミニストたちの主張²と照らし合わせることで理解することを目指すものの、その副次効果として両者の理論的結びつきを明らかにし、より広い理論史的観点の土台を提供するだろう。このようにフレンチ・フェミニズムとクィア・ネガティヴィティの接続を行ったうえで次に取り上げるのは、精神分析の理論家でありフェミニストであるジャクリーン・ローズの論とガヤトリ・C・スピヴァクによるローズ批判である。ここでは、ローズ的な「分割された主体」という概念について、スピヴァクの論点を考察する。本稿は最後に、スピヴァクのローズ批判から炙り出された問題をこれもまたスピヴァクによる別の批判に、すなわち西洋知識人による「労働者」主体の声の篡奪への彼女の批判に結び付ける。ここでは脱中心化された主体への批判の政治性に着目する。このようにして本稿は、クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの接続から明らかにされる諸問題をスピヴァクの提示する視点から考えることで、単にクィア・ネガティヴィティを否定するのでもそれを無批判に称賛するのでもなく、その否定性の意味することをラディカルに考え直していく。そうすることでクィア・ネガティヴィティの他者の(不)可能性を、とりわけその倫理的意義にも着目しつつ、明滅させてみたい。

1 クィア・ネガティヴィティとフレンチ・フェミニズムの比較

——固有／適切でない主体をめぐる

まず示してみたいのは、フレンチ・フェミニズム、もう少し広く言えばラカン派精神分析を批判的に継承したフェミニズムとクィア・ネガティヴィティの議論との類似点である。第一に指摘すべきは、両者がラカン派精神分析に依拠しているということだ。両論を一読すれば明らかなこの点について筆者が強調しておきたいのは、エーデルマンもフレンチ・フェミニストとして分類される論者も、主体の形成について、欲望と言語、むしろ言語としての欲望といった観点から説明を行っているということだ。この第一の類似点は、より注目すべき他の類似点と不可避的に関係する。第一の類似点から帰結する第二の類似点は、自らに対して固有であるような個人主義的主体という近代以降前提とされてきた主体モデルに反して、両者が分割された主体 (divided subject)、さら

には固有／適切でない主体という在り方を提示していることである。象徴界秩序が言語的なものである以上、その中で構成され、自らの同一性をシニフィアンにおいて表出しようとする主体は、常に自己から疎外されざるを得ないし、逆に言えば、そのような構造的自己疎外こそが主体の成立の条件なのだ。エーデルマン（2004）は次のように分割された主体を定式化する。

主体としての我々の象徴界的構成の疎外的で無意味な徴としてのシニフィアン…。このシニフィアンは一種の約束的なアイデンティティ／同一性のみを、われわれがそれと完全に一致することなど決して果たせないようなそれのみを授ける。なぜなら我々は…我々を分割しつつ逆説的にもそのような分割（division）の行為を通してのみ我々を主体にするギャップを閉じることによって、我々が何を意味しようとする意味するものに追いつこうと望むことしかできないからなのだ（p. 8; 強調は原文ママ）。

また、クリステヴァのフェミニズムに関する論文を訳出し、アンソロジー化した棚沢直子（1991）は、「クリステヴァの主体思想」を簡潔に整理している。

この概念〔クリステヴァの主体概念〕はそれまでの自己同一的なそれではなく、「今語りつつある主体」、つまり語りながら言語の中の言語でないもの…を噴出させていく、いわば非同一な主体の概念である。彼女に言わせれば、主体にはそもそものはじめからこのでないという否定性、この他者性、異質性、異端性、外国人性がその核に内在している。そして、主体が語るときに、これが湧出して主体の自己同一性を破壊しつつ、再構成し、同時に社会に働きかけ、社会性を破綻させ、更新し、拡大していくのである（pp. 238-9; 強調は原文ママ）。

厳密に言えば、シニフィアンが課す不可能な同一性による分割と、言語の中で言語でないものを維持することによる分割とは必ずしも同じではない。しかしながら、象徴界に収まることのないもののゆえにそもそも自己同一化できな

いものとして主体が構成されること、どこかその主体に「でないという否定性」が見出され、「社会性を破綻」し「拡大」するモーメントがあるとされることは、「反社会性」や「否定性」が焦点化されるクィア・ネガティヴィティについての議論において無視されるべきものではないだろう。

主体の固有なものを非固有化すること、もしくは常に非固有化されたものとしての主体。しかしながらこのような主体概念を提示するだけなら、これらは他の精神分析系批評と大した違いはない。また、すべての主体が常にこのような構成的矛盾を抱えているからと言って、すべての主体が等しく象徴界秩序を攪乱するわけでも逆にそれに完全に従属するわけでもないということは明らかだろう。とすれば、ファルス中心主義的秩序や再生産的未來主義を変革できる、ある意味で特権的とも言える主体とは、どのようなものなのか。言い換えれば、主体の非自己性、不適切さを明示的に表示する不可能な形象、非主体としての主体とは、一体誰なのか。フェミニズム、クィア理論としてこのような(非)主体を分節化するとはどういうことなのか。これらの問いがもう一つの類似点の鍵である。すなわち第三に、象徴界秩序を可能にしつつ、そこから排除されざるをえない構成的外部をエーデルマンもフレンチ・フェミニズムの理論家たちも打ち出しているのだ。そしてそのような象徴界の構成的外部とは、フレンチ・フェミニズムにおいては「女性」と名指され、エーデルマンにおいてはクィア、もしくは「症性愛者 (sinthomosexual)」³ と名指されていた。

たとえば先の棚沢の引用では明らかでない否定性の担い手を、クリステヴァは次のように明示する。

[権利要求の場面などよりも] もっと深い意味では、女性はであるということができません。…女性の実践は、存在するものに逆らって、「それではない」とか「まだそれではない」とか言うための否定でしかありえません (519; 強調は原文ママ)。

またシクスーは、「メデューサの笑い」(1975) で女性を「脱固有化」するものとして次のように定義する——たとえ定義という語がこの文脈でいかに不^{イン}適切なものだとしても。

「女性に固有な」ものがあるとすれば、それは逆説的なことに、打算抜きに自らを脱固有化するという彼女の能力なのだ (p. 50)。

対して、アイデンティティ・ポリティクスを批判する文脈でのエーデルマン (2004) の、多分に皮肉を込めてはいるが適切なクィア (理論) の否定性についての描写は次のようなものであるが、その特質をシクスーによる定義のそれと比べないことは困難を極め、彼があたかも彼女の議論を領有したのではないかと錯覚させられる。

アイデンティティ主義のマイノリティたちの政治的諸介入が…対立的なものとして適切に (properly) 形を帯びうる…一方で、クィア理論の対立はまさしくそのようなあらゆる対立の／というロジックに対するものであり、その固有な (proper) 課題は、すべての尤もらしさ／恭しさ (propriety) の止むことなき脱領有化 (disappropriation) である (p. 24; 傍点強調は原文、太字強調は筆者)。

注意しておけば、このような「女性」、もしくはクィアが象徴界秩序の構成的外部の形象と見なされるからといって、実在する個々の女性や同性愛者がみな現在の社会にとって批判的実践を必ず行うというわけではない。エーデルマンやフレンチ・フェミニズムの論客が論じるのは、あくまで現在の社会体制からアブジェクトされたものが当の体制にとって逆説的にも必要不可欠なものとなっているということであり、また、そのような体制から懸け離れて何らかの本質的に革命的な実体があるわけではないということなのだ。

もちろん、クィア・ネガティヴィティの議論とフレンチ・フェミニズムの議論には見過ごすことのできない差異もあるだろう。たとえば死の欲動への注目の有無はそのような差異の一つである。『未来なし』はヒッチコックの『鳥』を具体例に挙げ、死の欲動を「非人間的なもの」の拡大として論じているが (Edelman, 2004, p. 152)、フレンチ・フェミニズムにおいてはそのような象徴界秩序を攪乱するモーメントは、「父の名」介入以前の母子関係が参照されながらむしろ、享楽に求められてきたと見てよいだろう。しかしながら重要な

ことに、エーデルマンは死の欲動を享樂と、さらに付け加えるならクィアとほぼ同義的に用いている。曰く、クィアネスが体現する「現実界の残余」への「一つの名は、ラカンが記述するように、享樂である」(Edelman, 2004, p. 25)⁴。両者の違いはあくまで、同性愛者、母としての女性というそれぞれの形象との、現今の秩序におけるそれぞれの差別的かつ支配的イメージ——たとえば「死すべき同性愛者」、「子供と未分化な母」といったような——との不可能な同一化の要請から来るものであって、両者の差異を考慮することはそれぞれの分野での理論化という面では不可欠であるものの、そもそもの象徴界の要請に対する抵抗の可能性は共に、主体の象徴界参入以前の欲動の充溢に結局は求められるのだ。それゆえ一見したところの大きな差異も実は、両者の類似性を指し示していると言える。

2 固有／適切でない主体への批判

——スピヴァクの脱構築的分析とイデオロギー批判から

したがって、私たちはクィア・ネガティヴィティの議論と精神分析系フェミニズムの議論との間にクルーシャルな理論上の類似点を見出すことができるし、そのかぎりでは精神分析系フェミニズムへの批判をクィア・ネガティヴィティへの潜在的な警告として見ることは十分意義のあることだろう。この点を踏まえて、次にスピヴァクによるジャクリーン・ローズへの批判を見てみたいが、その前に当のローズの『視覚の領野におけるセクシュアリティ』(*Sexuality in the Field of Vision*)の導入部での主張の骨子も振り返っておきたい。

ローズ(1996)の当該のテキストにおける主な主張の一つは、幻想の役割を強調する精神分析、イデオロギー批判を行うマルクス主義、さらに性的ヒエラルキーを問うフェミニズムの三者を分離させてはならないということだった(p. 7)。このような三者の接続においては、女性の心的抑圧と社会的疎外が還元的でないかたちで焦点になり、女性主体が現在の社会の認識論的フレームにおいていかに構成されるかという点が介入的言説の集結地点として注目されることになる。このような分析は、たとえば以下でも述べるように、分裂した主体としての女性を強調することなどにおいて今までに確認した精神分析的フェミニズムの主張と重なる部分が多いのであり、それゆえにクィア・ネガティ

ヴィティの議論を考える際に参照すべき議論であると言える。政治分析と精神分析、フェミニズムの交錯、および女性の主体性について印象深い箇所を引用しておこう。

…次のように言ってみよう。分割された主体性の概念が政治的分析と要求とに共存できないというのではなく、フェミニズムはセクシュアリティ…と性的差異…の前景化を自ら行うことを通じて、とても多くの伝統的政治的分析がしばしば依拠してきた諸々の二項対立…に挑む特権的な位置にいるのだと。というのも、…自らと反目する主体性 (**a subjectivity at odds with itself**) という概念のみが女性たちに性的アイデンティティの地点における袋小路への権利を与え返すのであり、そこには規範への自らの可能なもしくは将来的な統合へのノスタルジアなどといったものはないということは正しいままなのだから (Rose, 1996, pp. 14-5)。

個々の対立ではなく、あらゆる二項対立の問題を性的差異とセクシュアリティの観点から問い直す視点は、個々の政治対立が揃って依拠する社会の対立それ自体を批評対象とするクィア・ネガティヴィティに近いかもしれないし、完全には規範に統合されえない「自らと反目する主体性」と女性の関係は、今まで見てきた固有／適切でない主体とも無関係ではないだろう。

さらにローズは、当該テキストの後半部でデリダの脱構築に対する疑義を投げかけている。曰く、デリダはあらゆる二項対立を超えようとしているが、たとえば彼のニーチェ読解などにおいて不用意にも女性を差延と同一視することで、男女の二分法を温存し、しかもそのような現在のシステムの表面に現れない形而上学的次元を女性に割り当てることで、実存する女性のセクシュアリティへの分析を妨げているというのだ (Rose, 1996, pp. 20-22)。

それでは、スピヴァクはローズの議論のどこに問題を見出したのか。主なポイントは二つである。第一に、先に引用したように、ローズがラカン派精神分析を踏まえて女性の主体性を「自らと反目する主体性」、もしくは常に分割されたものとして捉え、そのような「袋小路への権利」を要求するかのように見

えるのに対し、スピヴァク（2009）はそのような様態を「注視されるべき拘束」として見ている（p. 137）。繰り返しておけば、分割された主体の特権的位置に関するこの批判はエーデルマンの論点にも直接向けられる。スピヴァクはまた、フェミニストがいかに精神分析から利することができるかローズが述べている箇所を引用し、批判を加える。重要な箇所なので、引用されたローズの文章とそれへのスピヴァクの評価を煩雑ではあるが引いておこう。

フェミニズムが精神分析に依拠しなければならないのは、いかに諸個人が自らを男性もしくは女性と認識するかという問題が、彼女ら彼らがそうするようにという要求が、不平等と従属の諸形式と、すなわちそれらを変えるのがフェミニズムの目標であるような不平等と従属の諸形式と根源的な関係にあるからである⁵（Rose, 1996, p. 5; Spivak, 2009, p. 138）。

…上に引いたローズの文章の最後の部分に含まれる、[文前半に引き続く] 次のステップは、私を困惑させる。そのステップは認識論／存在論から倫理政治的プロジェクトへの手早い移行を覆ってしまっているのだ。…ローズが示唆するように主体の内部の分割（**division**）を認めることが肝要であるにしても、一方の認識論の主体（女性）と他方の倫理政治の主体（フェミニスト）との間の還元不可能な差異を認めることも劣らず肝要であると私には思われる（Spivak, 1996, p. 139）。

すなわち、とりわけ精神分析的アプローチによって明らかになるはずの存在論的／認識論的主体、女性主体と反セクシズムの立場から行動する倫理政治的主体、フェミニスト主体という二つの次元の主体がローズにおいては短絡されているのであり、これがスピヴァクの第二のローズへの論点となる。本稿の前提に沿って指摘すれば、エーデルマン（2004）もまた、あくまで象徴界秩序の外部として認識論的に理論化されてきたクィアを次の引用のように「倫理的」次元へとスライドさせることで、スピヴァクのローズへの第二の批判点を反復しているように思われる。

症性愛者の非情／非人間性 (inhumanity) を、不可能性を擁すること。それは…クィアたちが選ばれし倫理的作業 (the ethical task for which queers are singled out) なのだ (p. 109)。

しかしながら、そもそもなぜこの二つの点が問題となるのだろうか。ここでは敢えて図式的に、原理的側面と政治的側面にわけて論じてみたい。まずはスピヴァクが指摘する二つの問題を超越論的に、もしくは原理的な視座から考える。彼女のここでの議論の枠組みは一言で纏めてしまえば、範例的にデリダに、とりわけハイデッガーとニーチェを読む彼に則っている⁶。すなわちスピヴァク (2009) / デリダは、存在者は存在を問うよう定められつつその問いに答えることはできないという存在論的差異についてのハイデッガーの定式をまず参照する (p. 139)。とはいえしかしスピヴァク (2009) / デリダによれば、「存在があるとひとが言う以前でさえ、そのような命題の一部であるかぎり、存在が自らに固有でありうるという決定があるのでなければならない」(pp. 142-3, 強調は原文ママ)。あらかじめの固有化によってこそ存在と存在者の区別 (存在論的差異) が可能になるという点で、この固有化の暴力に晒されるものは「前存在論的」な「他者」であり、このような前存在論的な他者を、私たちは存在者として成立している限りでつねにすでに前提してしまっている。固有化の暴力に晒される他者へのいわば暗黙の「応答」が「私」を可能にするのであり、そのような必要な可能性としての応答=責任 (responsibility) に関わるものという点で、この他者との関係は「倫理的な」ものである。こうしてスピヴァクは、政治的主体はそもそも「倫理的」で「前存在論的」な「全き他者」への応答なしにはありえないし、さらに言えば存在論的／認識論的主体もそのような応答という不可能な条件なしに可能にはならないということを確認していく。スピヴァク (2009) 曰く、

認識論／存在論の主体と倫理政治のそれとの間の連続性を想定するいかなるプログラムも、差異化 [差延化] されていない (undiffarnciated [sic]) (ラディカルに前連続的な) 倫理的なものである全き他者への／の呼びかけが政治的なものの可能性の条件であることを、存在論／認識

論のための主体の固有化 (propriation) もすでにこの条件を通じて可能となっているのだということ、能動的に忘れざるをえない (p. 141)。

ただし注意せねばならないことに、このような経験的なものの根拠としての全き他者は、結局のところ経験的な言語の流用によってしか、カタクレシスによってしか示されえない。そしてこのような概念の概念性自体を示すものを考える際に参照されるのがニーチェである。ニーチェは存在論的差異を直接問うてはいなかったものの、固有化という点について、あるものがあるものとして「真理」化されるプロセスについて、性的差異を比喻に用いて語っていたのであり、そのような固有化を示すカタクレシスが「女性」とされていた (Spivak, 2009, p. 141)。言うまでもないが、ニーチェはフェミニストであったわけではない。事態は正反対だ。ニーチェが哲学者、人間／男性による真理の捏造の系譜学的批判を行う際に女性を「真理」と名指すとき、彼は「女性とは自らを与える／演じる (sich geben)」ものである、それ自体では自らを固有化せず、つねに固有化されえないのに固有化されるものであるとする、当時の家父長制的女性観とそれと共謀する個人主義とに浸ったままだった。より正確には、あまりに深くそのような女性観に浸っていたからこそ、そのような言説の構成的矛盾を、あるものがあるものとしてその固有の真理として捏造されるために前存在論的な固有化されえないものが固有化されるという事態を、彼のテキストは端的に示したのだ。だからこそ読者のなすべきことは、そのようなカタクレシスを無批判に受け入れるのでも全否定するのでもなく、たとえば典型的な女性蔑視のテキストにおいてそのような蔑視を崩壊させてしまうような形象に注意深くあること、暴力の構造を不可避免的に含むテキストにその暴力の解きほぐしの可能性を見出すことであり、そのような内側からの理解を含む読解は、スピヴァク (2009) において——否定性を論ずる本稿からすれば異様かもしれないが——「肯定的脱構築」と呼ばれる (p. 143)。このような言説の構成的矛盾についての考察は一見するとフレンチ・フェミニズムやクィア・ネガティヴィティの議論と近いが、いかなる主体も十全に脱中心的ではありえず、むしろ主体が常に中心化されていること、そのような主体の成立において全き他者の抑圧が行われることを示す点で、袂を分かっている。「脱構

築の有用な部分は、主体がつねに中心化されているという示唆にある」のであって (Spivak, 2009, p.147)、脱中心的主体は言祝がれるべきものではなく、その宣言が他者を忘却しないようあくまで注視されるべきものなのだ。

ここまでの点を踏まえてスピヴァクのローズへの原理的批判を整理しよう。第一にローズのように倫理政治的主体と存在論的／認識論的主体を短絡させることは、そのような主体をそもそも可能にする審級を忘却しようとする暴力を暗黙に反復してしまっている。また、脱中心化された主体としての女性を称揚する言説は、存在論的な主体にせよ倫理的な主体にせよそもそも主体が主体として成立する際には、先の他者の抑圧に伴う中心化が不可避であることを覆い隠してしまうし、さらには、そのような脱中心的主体がその存在において、自らの必要な他者なしに現在の社会を変えられるといったような、言わば原理主義的な、ニーチェとは異なれども本質主義的なスタンスに行きつく危険さえあるのだ。ラカン派精神分析を継承したフェミニズムにおける「分割された主体」の称揚がこのような意味で批判される以上、また、その「分割された主体」が特権的に脱固有化し／されるクィアと比べられる以上、クィア・ネガティヴィティの議論もこの批判を免れるものでないことは当然のことだろう。

ここまでの批判はしかし、脱中心的主体としての女性のフェティッシュ化に警鐘を鳴らすにしても、依然としてデリダの哲学的議論の枠に収まっている。そもそも存在論的主体と政治的主体との差異の無視と脱中心的主体の物語という二つのポイントは、政治的にはどのような悪しき効果を持ちうるのか。そこで忘却される他者は誰なのか。たとえそのように問うことができないにしても、そのような他者はどのように忘却されるのか問うてみてよいだろう。先のテキストでスピヴァク (2009) は、最終的には女性という名をサバルタン女性に与えることを要請しているのだが (p. 155)、そもそもローズへの批判とサバルタン女性の消去とはどのような関係にあるのか。ここでは『ポストコロニアル理性批判』の第三章におけるスピヴァクのフォーコー／ドゥルーズ批判を参考に考えたい。「サバルタンは語ることができるか」を元にしたこのしばしば引用される知識人批判を取り上げるのは、スピヴァクの政治的立場を確認するためではない。彼女の批判を再考する理由は、この批判においてローズへの

批判で指摘された二つのポイントとパラレルであると思われる二つの点が注目されているからであり、それゆえそこでの政治的批判がローズの枠組みのみならず、さらにはクィア研究の理論的潮流にも当てはまりうるからだ。以下の考察はそれゆえ、固有／適切でない主体についての原理的批判の政治的射程を明らかにするものだ。

スピヴァクのフーコー／ドゥルーズ批判の一つの注目点は、主権的主体の批判としてそもそもドゥルーズ自身によって提供された「欲望」というカタクレシスが経験的な次元の欲望へと還元させられることである。フーコーとの対話でのドゥルーズ（1972 / 1975）において、「あらゆる部分的で革命的な攻撃もしくは防衛」は「権力」を吹き飛ばそうとする「欲望」を通じて「労働者の闘争にリンクしている」とされるが（p. 217）、ここでの欲望はスピヴァク曰く（1999）、「『アンチ・オイディプス』の欲望ではない、すなわち（「主体」がそこで残基であるような）全般的フローへの慎重な誤名や、それに対していかなる適切な名も見つけられないようなもの、すなわち名目主義的カタクレシスではない」というのだ（251）。カタクレシスとしての欲望の流用というこの点は、ローズの議論が同じくカタクレシスとしての「女性」の忘却により、脱中心的主体としての女性という概念を打ち出しているように見えることへの批判と、ここでの二つのカタクレシスの抑圧による具体的な主体生成のプロセスは異なるにしても、関係づけられよう。もう一つのフーコー／ドゥルーズ批判のポイントは、ドゥルーズ（1972 / 1977）が「もはや表象／代理などなく、あるのは活動のみです」（p. 206）と宣言することにおいて、表象と代理、**representation** という同一の語に含まれる二つの語義の差異が無視されてしまうことである。事物や概念の描写としての表象（**Darstellung**）と、利害の委任としての代表（**Vertretung**）との差異化について、ここでスピヴァクはマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』での区別に依拠しているが、これらの短絡は、先に触れた存在論的／認識論的主体と倫理政治的主体との差異の短絡に、「である」ことと「する」こととの短絡であるという点で対応しているとみてよい。それでは、ローズ批判とも親和性のあるこの二つのポイントは、どのような政治的含意を持ちうるのか。

表象と代理の差異を無視することの政治的な帰結は、たとえばある同じ経済

状況下に属するという点で構成されるグループが、より支配的な別のグループの構成員を自らの利害の代表者に選ぶという資本主義体制に特徴的な現象を、たとえばマルクスの分析したような、ルイ・ボナパルトの実際には大ブルジョワジー優遇の政策が小土地所有農民やルンペンプロレタリアートの支持を得ていく過程を説明できないということだ。別言すれば、表象と差異の暗黙のすり替えについて批判的でない言説は、イデオロギーの作用の軽視に通じてしまい、「被抑圧者は自らの利害を自分で理解し、行動することができている」という疑わしく、かつ危険な想定を永らえさせてしまうのだ。スピヴァク(1999)は次のように述べている。

それら〔vertretenとdarstellen〕は関連しているが、それらを共に作動させることは、とりわけ両者を超えたところに抑圧された諸主体が¹力で語り、行為し、知る場があると言わんがためにそうすることは、本質主義的でユートピア的な政治に通じてしまう… (p. 259; 強調は原文ママ)。

そしてこのようなイデオロギーの軽視は、もう一つのポイント、すなわちカタクレシスとしての欲望の経験的次元への安易なスライドと関係することで、より問題含みとなる。フーコー／ドゥルーズの対話では、本来主権的主体とは異なる、残余としての主体の可能性の条件を構成するはずの欲望は、一方で虚偽意識としてのイデオロギーと対立させられる欺かれえないものとして、制度化されえないものとして経験的に位置づけられている。「カタクレシスの認められていないが不可避な経験的汚染によって、欲望は暗黙の裡に繰り返しオーソドックスなモデルに基づいて「定義」されているのだから、それは「欺かれている」ことへと一元的に対立させられる」(Spivak, 1999, p. 254)。他方であらゆる主体の可能性の条件としてのいわば超越論的な——あらゆるものに共通するという——含意が流用されることで欲望は、先に見たように、世界のあらゆる部分的な運動が「労働者たちの労働」なるものに繋がるような契機として評価されるようになる。かようにして、主権的主体の批判の議論は、結局は大文字の主体としての欲望と、それをそれぞれ体現し欲望にしたがって自らの

声を発するとされる労働者たちという小文字の主体群を打ちたてうる。その一方で、そのような「労働者の闘争」の打ち立てを、分析＝表象するという状態においてしかし代弁することで暗黙に行っているヨーロッパ知識人は、自らがそのような主体を代理／表象しているという事態を予め否認する——「もはや表象／代理はありません」——ことで、したがってまた国際的な分業体制における自らの位置づけを分節化しないことで、透明な主体として復権することになる。スピヴァク（1999）は以下のように纏めている。

フーコーとドゥルーズの対話では、問題はシニフィアンや表象などないということ…、理論が中継の実践であるということ…、そして被抑圧者が独力で知って語りうるということであるようだ。このことは少なくとも二つのレベルで構成的主体を再導入する。還元不可能な方法論的前提としての欲望と権力という大文字の主体と、被抑圧者という自己同一的でないにしても自己近似的な小文字の主体である。さらに、これらの大文字の主体でも小文字の主体でもない知識人たちは中継レースにおいて透明になる。というのも、彼／女らはリプレゼントされない主体について単にレポートしているだけであり、権力と欲望（によって前提される名づけられない大文字の主体）の働きを（分析することなく）分析しているだけだからだ。…この大文字もしくは小文字の主体は、興味深いことに否認によってともに透明性の内に縫い込まれながら、国際的分業の搾取者の側に属している（p. 265）。

本来、西洋近代の社会的枠組みに最も批判的であったはずの議論は、したがってスピヴァク（1999）によれば、西洋の理論家による「語るサルバタンの腹話術」（p. 255）と形容される事態を引き起こしうるのだ。

そしてここまでの「労働者」の闘争についての主体性の打ち立てと篡奪の議論は、スピヴァクにおいてフェミニズムと遊離した問題では全くない。むしろスピヴァクが指摘しようとするのは、資本主義のグローバルな進展とともに西洋の知識人女性もしくは女性運動が国際的にリーチするにしたがって、いつの間にか特定の女性「である」ことと特定の女性として「する」ことの区別があ

やふやにされたまま、その恣意的な（非）区別においてサバルタン女性が動員されていくことである。実は、表象と代理の差異の無視から帰結する「本質主義的でユートピア的な政治」についての先の引用には次のような続きがあるのだ。

そのような政治は、階級よりもシングル・イシューのジェンダーへと転移されるときには、地球の金融化に疑いを挟ませないサポートを与えうるし、地球の金融化は、国連行動計画を通して農村部の信用貸に餌付けされた女性たちを「フォーマット化」して彼女が「発展」されるようにしつつ、無慈悲に彼女の内に一般意志を構築するのだ（Spivak, 1999, p. 259)

公平を期せば、上記引用箇所直接に批判されているのはフレンチ・フェミニズムではなく、国連主導のフェミニズムである。しかしながら、ポスト構造主義的カタクレスの経験的次元への短絡とそれに伴う欲動的（非）主体の形成、「である」ことと「する」ことの差異の忘却という点においてフレンチ・フェミニズムとフォーコー／ドゥルーズにおける問題が共通している以上、より根源的な意味でフレンチ・フェミニズムは上で懸念された事態を理論的に促進してしまいうる。スピヴァクがローズにおける「女性」という超越論的カタクレスの流用と、倫理政治的主体と存在論的認識論的主体の差異に拘泥していた理由は、おそらくローズのそのような議論の危険性を、脱中心化された主体を主張しつつその他者を認めず、しかし同時にその他者を自らの脱中心性を担保するようかたちで動員していくことの政治的危険性を見て取っていたからだろう。形而上学的批判とイデオロギー的批判はかように補綴されねばならない。さらに言えばこれらのような批判こそ、コントロールされえない欲望に則る主体化されない主体の称揚に付随しうるリスクをマークするという点で、クィア・ネガティヴィティの（非）主体の議論にも向けられる必要があるのだ。

3 結ばれるべきでない結語——否定性の他者、他者の否定性

本稿はここまで、クィア・ネガティヴィティのクィア理論における特権的位

置を概観したうえで、クィア・ネガティヴィティの議論をフレンチ・フェミニズムやラカン派精神分析系のフェミニストのそれと比較し、そこで炙り出された共通点をめぐって、スピヴァクの原理的かつ政治的批判を参考にクィア・ネガティヴィティの（非）主体の可能な暴力について警鐘を鳴らした。

注意しておけば、ローズもエーデルマンも第三世界の女性や同性愛者たちを自らの理論に引きずり込んではいない。また、フレンチ・フェミニズムやクィア・ネガティヴィティの理論的貢献を過小評価することは不可能である。再生産的未來主義を問い直すことも、女性的エクリチュールを追求することも、象徴界から排除されたものがいかに象徴界を可能にするのか考察することも依然として重要だろう。さらにクィア・ネガティヴィティに限って言えば、フレンチ・フェミニズムに対する批判を認めるにしてもクィアは同じ轍を踏みはしないと考えることもできるかもしれない。

けれども多くの分析は似たような轍がより巧妙に踏まれつつあることを示唆している。たとえば欧米におけるLGBT政治とナショナリズムの共犯関係を指摘したジャスビル・プア（2007）は、LGBTアイデンティティと異なってクィアネスは「アイデンティティ規範を特異に超越している」（p. 22）のだから、その意味で固有な主体になりえないのだから、オリエンタリズム的——すなわち他者の〈否認〉を構成的要素とする——ナショナリズムの枠組みに取り込まれないのではないかという批判に答えて、次のように指摘する。

[そのようなクィアの超越の主張は] つねにすでに権力の規範化する諸々の力に意識的で、つねにそれらを転覆し、食い止め、超越でき、そうする準備のある不可能な超越的主体に行きつく。正に有責性を否定することで、もしくは諸々の他者への暴力的諸関係に絡めとられていないと、自分がそれらの外部にいと想定することで、暴力が永続されうるのだ（Puar, 2007, p. 24）。

それゆえ、欧米圏のLGBT政治の主流化が進む一方でクィアの固有／適切でない主体が称揚されるかぎりでも、またそのプロセスとあたかもパラレルな、先に見た西洋のフェミニズムの国際化とそれに並行した不可能な女性アイデン

ティティの噴出の共犯関係を考慮するなら、クィア・ネガティヴィティの意図せざる暴力とそれによる（非）主体の温存について警戒しないことはむしろ不可能である。欲望のコントロールによる個人の成立を特徴とする社会への実践的な抵抗の契機を、実存する女性や同性愛者たちすべてでなくとも、そのような社会において不可避免的に自己矛盾を持つものとして構成される特定の主体存在そのものに見出すというアクロバティックな作業によって、そのような主体を可能にしつつ不可能にする他者が忘却されうるということを、その政治性に注意を払いながら指摘しておかなくてはならないのだ。

クィア・ネガティヴィティを否定するのではなく、「注視されるべき拘束」と見ること、その否定性を肯定しつつ、むしろ肯定することを通じてその他者の（否定性の）痕跡を不可能にも「肯定」すること。それはいかに可能だろうか。この問いを開いておくことを、クィア・ネガティヴィティの否定性自体にとってのラディカルな否定性へと応答するという肯定的な作業の一助として提案しておきたい。

Author note

本稿は2015年4月に国際基督教大学にて行われた公開討論会「クィア・ネガティヴィティ再考」で筆者が行った発表に基づいている。この討論会をオーガナイズしてくださったCGSおよび東京大学清水晶子研究室に、また筆者の他の報告者諸子に、そしてディスカッションの際に有益な指摘をくださった複数の匿名の参加者に感謝したい。

また、本稿のスピヴァク及びブアについての理解は、筆者が主催している私的な読書会「フェミニズムと脱構築」で練り上げられたものだ。本稿での議論に光るものがあるとするれば、それは読書会参加者の指摘及び質問によるものであるが、本稿の理解に脆さがあるとするれば、それは無論筆者の取りこぼしによるものだ。

最後にしかし些末ではないこととして、2名の匿名の査読者に向けて、ともすれば議論の枠を狭めがちな本稿に反省の機会を与えてくださったことについて、お礼を申し上げる。

Footnotes

- ¹ 訳語の選択について弁明しておきたい。筆者は当初、“queer negativity”を「クィア否定性」と訳そうとした。この訳語はしかし、クィアを否定する何かという意味にも取られかねない。「クィアの否定性」はよりクィアの否定的性格を表していると思われるが、クィアの名詞化を通じてそれを実体化することに参与しかねない。「クィアな否定性」は他方で、実体化を避けつつもその形容詞化によって、クィアが持つ文字通りの否定の性格を希薄化させる。それゆえ、日本語の議論への置き換えを重視せねばならないことを認めつつも、上記のような懸念を抹消しないように「クィア・ネガティヴィティ」という表記を筆者は採用した。
- ² フレンチ・フェミニズムは、周知の通りどれほど奇妙に聞こえようとも、英語圏の産物である。ただしこの生産が一樣ではなかったことには、あまり注意が払われていない。スピヴァクも別の論文で引いたことのある、1980年に出版されたマークスとドゥ・クールティヴロンによる『新しい諸々のフレンチ・フェミニズム』というアンソロジーはたとえば、ポーヴォワールなどの現在では狭義のフレンチ・フェミニズムの論者に含まれない論客を選んでいて、本稿の対象はクリステヴァやシクスー、イリガライといったラカン派精神分析を批判的に受容した著者は勿論のこと、彼女らに影響を受け、彼女らを一つのグループにまとめた英米圏、日本のフェミニストを含んでいる。なぜならそのようなグルーピングがフレンチ・フェミニズムを「産んだ」からだ。ちなみにフレンチ・フェミニズムに対応するような日本でのカテゴリーは、「現代フランス女性思想」——「フェミニズム」ではない——というものだろう。このような時代的かつ地域的に異なってきた腑分けはしかしながら、本稿後半の論点と重ねると、より大きな問題を提示する。というのも、これらの差異は第一世界の知識人に対して第三世界の「労働者」という他者がいるということではなく、第一世界の理論内部にすでに亀裂が入っていたことを示してしまうからである。また、フェミニスト主体と女性主体のスライドという本稿中盤以降に扱う論点もここには見出される。これらの問題の分析及び解釈は現在の筆者の能うところでない。
- ³ 「それぞれの主体が象徴界、想像界、現実界の秩序を編み込もうとする個別の仕方」であり、「象徴界的現実への主体の取り組みの必然的条件」でありながらも「象徴界論理を拒否する」ような、社会の「アンチテーゼ的定礎」としてのラカンの「サントーム (sinthome)」を、「反社会的な」ものとされてきた「同性愛」と結び付けることでエーデルマン (2004) は「サントーモセクシュアリティ」というこの反未来主義的な新語を鑄造している (pp. 35–6)。筆者の訳は、「症候」と「同性愛」のみ

ならず、同性愛と置き換えられ並置されながら病理化されてきた「小児性愛」をも音のレベルで一語の内に響かせることで、「社会秩序と御子を犯せ！」(Edelman, 2004, p.29) という反社会的テーゼを反復しようとした。

- 4 死の欲動、享樂、クィアのこのような近接性ゆえに、上述したようにエーデルマンの議論はベルサーニのそれと共鳴するものとして受容されてきたが、両者の異同、およびその政治的効果については、ラカン派精神分析とフロイト派精神分析というそれぞれの理論的土台の違いも踏まえて今後議論されなければならないだろう。
- 5 この文はしかし、若干恣意的な引用である。というのも、スピヴァクは「精神分析に依拠しなければならない」という文言を補っているが、原文中の前文（「このこと [アイデンティティの問いが精神分析にとって中心的であったということ] が、ラカン派精神分析がフェミニズムと映画分析という二つの道を通して…英米圏の知的生活に入ってきた理由である」）を考慮するなら、当該の文は「なぜフェミニズムを通ってきたか」といって、いかに諸個人が…からである」というように訳せるからだ。ただし、ローズの論文全体の趣旨はフェミニズムと精神分析（およびマルクス主義）が互いに補うように使用される必要があるというものなので、ここでの恣意的な引用によるスピヴァクの分析への大きな影響はほとんどない。
- 6 この読解についてはデリダ『エプロン』（1978）を参照。

References

- 高橋哲哉. (2003). 『デリダ——脱構築』(現代思想の冒険者たち Select版). 東京: 講談社.
- 棚沢直子. (1991). 「解説 クリステヴァの女性思想——母が自ら語りはじめるとき」(J・クリステヴァ『女の時間』棚沢直子、天野千穂子訳所収). 東京: 勁草書房. 235–271.
- Casero, R. L., Edelman, L., Halberstam, J., Muñoz, J., & Dean, T. (2006). The antisocial thesis in queer theory. *PMLA*, 121 (3), 819–828.
- Cixous, E. (1975). Le rire de la Méduse. *L'Arc*, 61, 39–54.
- Derrida, J. (1978). *Éperons: Les styles de Nietzsche*. Paris: Flammarion.
- Edelman, L. (2004). *No future: Queer theory and the death drive*. Durham and London: Duke University Press.
- Foucault, M., & Deleuze, G. (1977). Intellectual and power: A conversation between Michel Foucault and Gilles Deleuze. In M. Foucault, *Language, counter-memory, practice: Selected essays and interviews* (pp. 205–217). (Donald Bouchard & Sherry Simon, Trans.). Ithaca: Cornell University Press, 1977. (Original work published 1972)
- Kristeva, J. (1977). *Polylogue* (Collection "Tel Quel"). Paris: Éditions du Seuil.
- Marks, E., & De Courtivron, I. (Eds.). (1980). *New French feminisms: An anthology*. New York: Schocken Books.
- Puar, J. (2007). *Terrorist assemblages: Homonationalism in queer times*. Durham and London: Duke University Press.
- Rose, J. (1996). *Sexuality in the field of vision* (Verso Classics ed.). London: Verso.
- Spivak, G. C. (1999). *A critique of postcolonial reason: Toward a history of the vanishing present*. Cambridge and Massachusetts: Harvard University Press.
- Spivak, G. C. (2009). *Outside in the teaching machine* (Routledge Classics ed.). New York and London: Routledge.
- Wiegman, R., & Wilson, E. A. (2015). Introduction: Antinormativity's queer conventions. *differences*, 26 (1), 1–25.

* 上記文献には日本語訳された著作もあるが、本稿では文脈等の関係でそれらの訳を採用せず改めて拙訳したため、スピヴァクが自身の論文において英語

で引いていた Foucault & Deleuze (1977.) を除き、原典のみを参考文献として載せておく。

The Impossible Affirmation of Queer Negativity: A Deconstructive Critique of Improper Subjects

Yuki HANYU

Resonating with early queer theory's motifs such as appropriation, Lee Edelman's *No Future* or its central theme, queer negativity, has received not only applause but also fair criticism, and thereby occupied one of the central positions in recent queer theory. In response to such criticism, Edelman clarifies that the negativity he proposes should not be equated with the simple negation of particular political positions, and its refusal of "positive identity" should rather be directed to the identity principle on which our whole society rests. Although such a radical challenge to positive identity cannot be underestimated, we might question whether such a drive-like, amorphous queer resistance tacitly preserves or rehabilitates the positive identity it purports to negate. It should also be asked how, while criticizing such an insidious risk, we can reframe queer negativity.

In order to answer these questions, this paper firstly examines the similarities between the argument of queer negativity and that of French feminist theory, focusing on the concept of improper subject; both arguments, relying on Lacanian psychoanalysis, insist on dis (ap) propriation of identity.

After demonstrating their connection, the second section of this paper explores the criticism offered by Gayatri C. Spivak of such insistence on the divided subject, and, by doing so, marks the risk that the argument of queer negativity might entail. This section first considers her criticism against Jacqueline Rose. Based on Derridean affirmative deconstruction and his use of catachresis, Spivak proposes to understand the subjectivity of the decentered subject not as a privileged right but as "a bind to be watched". She also warns against Rose's reduction of the difference between the ontico-epistemological subject and the ethicopolitical subject. Through a

reading of such criticism, this paper suggests that an argument like that of Rose implicitly obliterates the trace of the wholly-other, which is only noticeable by attending to the catachresis “woman”, and that it reintroduces the sovereign subject.

The latter part of the second section connects such metaphysical arguments with the political analysis also made by Spivak. This part explores the criticism against Foucault / Deleuze, focusing on (A) the status of the “desire” as catachresis and (B) the inattention to the gap between descriptive representation and political representation, which can be respectively compared with (A’) the status of the catachresis “woman” and (B’) the reduction of the difference between the ontico-epistemological subject and the ethico-political subject. The inattention to the gap between *Darstellung* and *Vertretung* leads to, according to Spivak, the perpetuation of bourgeois ideology. Functioning with that kind of ideology, the confusion of the desire of the empirical instance with that of the transcendental instance rehabilitates the *S* / subject and implicitly preserves the transparent subject of the theorists. This paper, based on the similarities between the argument of queer negativity and that of the French feminist theory demonstrated earlier, lastly directs the criticism on French theory offered by Spivak to the argument of queer negativity. It concludes that queer negativity is to be “watched” in order to affirm the radical negativity of the other.

Keywords:

queer negativity, French feminism, deconstruction, desire, catachresis